２．　ヴァイオリン協奏曲第１番　ト短調　作品２６　（ブルッフ）

ブルッフ（Max Christian Friedrich Bruch：1838～1920）は、ケルンに生まれたドイツの作曲家である。作品は協奏的なものが多く、中でも、ヴァイオリンを独奏とした『スコットランド幻想曲』や、チェロを独奏とした『コル・ニドライ』が特に親しまれている。“協奏曲”と名付けられた作品において、ヴァイオリンを独奏とするものは３曲発表されているが、この第１番が、一番多く演奏されている。

さて、日本人はとかく「３大○○」というものが好きで、例を挙げると「３大Ｂ（Bach、Beethoven、Brahms）」、「３大栄養素（炭水化物、タンパク質、脂質）」、「３大大仏（奈良、鎌倉、高岡）」、「３大うどん（讃岐、稲庭、氷見）」などである。このうち「B」と「栄養素」については万人が賛同するところであるが、「大仏」や「うどん」など、その“第３番目”において、“地元推し”や“好み”で意見が分かれる余地のあるものもある。「ヴァイオリン協奏曲」においても然りである。ベートーヴェン（ニ長調：1806 年）とメンデルスゾーン（ホ短調：1844 年）については異論はないだろうが、“第３番目”としては、共に 1878 年にニ長調で作曲されたブラームスとチャイコフスキィのどちらを選ぶべきか大いに迷うところである。そこで登場するのが「５大○○」である！そうなると、次は「第５番目は何？」ということになり、シベリウス（1903 年）が有力なのであろうが、ヴィヴァルディの「四季」（1725 年出版）も外し難いし、何と言ってもここに「ブルッフのヴァイオリン協奏曲第１番」がランクインしてほしいものである。

さて、前置きが冗長となってしまったが、この協奏曲は 1866 年に作曲され、ヨアヒム（ブラームスの協奏曲の初演者としても有名）に献呈され、改訂が行われている。

第１楽章　“Prelude（前奏曲）”　Allegro moderato　ト短調　４分の４拍子

ティンパニのトレモロ（細かい連打）に続けて、木管楽器が序奏主題を奏でると、独奏ヴァイオリンがレチタティーヴォ（語るような歌唱）風に応答する。

この主題がオーケストラでの強奏で現れると、曲はソナタ形式の提示部に移行する。

独奏ヴァイオリン（以下「独奏 Vn」という。）による第一主題は、重音（同時に２つ以上の音符を弾くこと）を多用した勇壮な雰囲気である。

一方、第二主題は対照的に、順次進行（音階の並びに沿った音楽の流れ）を基調としており、優雅さが感じられる。

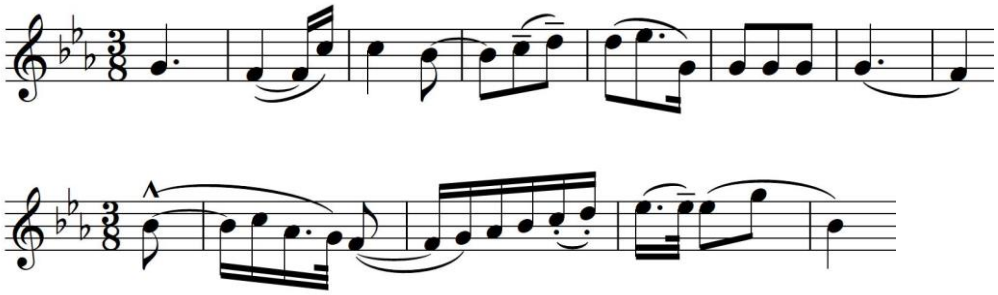
短い小結尾（１２小節）を経てすぐに展開部に移行すると、ここでは先ず、第一主題が独奏 Vn で示され、それを展開していく中でオーケストラが第二主題のモチーフを重ねている。

オーケストラの強奏が鎮まりを見せ、序奏主題が再現されると、ここからが再現部であるが、なんと、第一主題も第二主題も再現されず、また、明確なカデンツァ（独奏者の腕自慢）も現れず、序奏主題と独奏 Vn の対話が２回現れるだけの短い部分となっている。独奏 Vn の上行音形に応えるように、序奏主題が強奏されて開始する終結部の後に、曲は切れ目なく静かに第２楽章に進む。

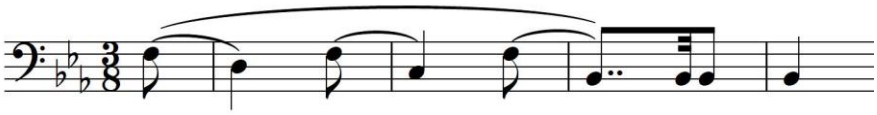
第２楽章　Adagio　変ホ長調　８分の３拍子

この楽章は、抒情的な主題を３つ持つ自由な形式をとっているが、「提示部」－「第二主題による経過部（中間部？）」－「再現部」－「終結部」の構成となっていることから、あえて型に嵌めるのであれば、複合三部形式と言えるかもしれない。

提示部は、独奏 Vn が第一主題と第二主題を続けて演奏する。



その後、第二主題の後半部分をモチーフとして展開が行われると、続けてホルン、チェロ等により第三主題が朗々と提示される。

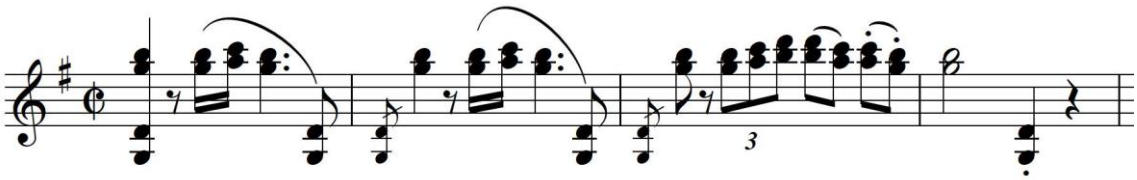


独奏 Vn が第二主題を奏でる短い経過部（中間部、１６小節）がティンパニのリズムで終結すると、曲は再現部に移行する。第一主題の再現は第１ヴァイオリンが懐かしむように歌いだす。第二主題の再現は、チェロで始まるが、ここでは独奏 Vn は伴奏的要素を奏でている。主題が木管楽器、ヴァイオリンと受け継がれる中で高揚すると、金管楽器、低音弦楽器などで第三主題が再現される。

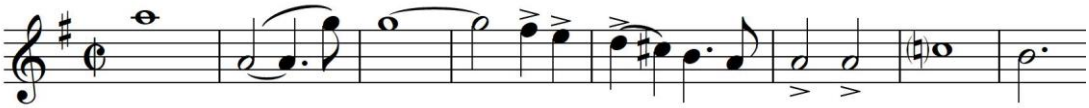
独奏 Vn による第三主題の再現ののち、落ち着きを取り戻すと、曲は終結部に移行し、ここでは穏やかに３つの主題が再現される。

第３楽章　“Finale（終曲）”　Allegro energico　ト長調　２分の２拍子

ビオラの刻みに乗せて第１ヴァイオリンが第一主題のモチーフ（主題における旋律的要素の最初の部分）を奏でる。それが木管楽器にも現れ、次第に高揚すると、それに導かれて、独奏ヴァイオリンが第一主題をエネルギッシュに奏でる。



この主題が２度確保（再登場）されると、モチーフの連呼で始まる経過句ののち、跳躍を基調とした第二主題が現れる。



その後、展開的な部分に移行し、そのなかで第一主題がオーケストラ全体で登場する。

続く、独奏 Vn による第一主題の再現からが「再現部」となるであろう。第二主題の再現が主調（ト長調、提示時はニ長調（属調））に転じていることから、この楽章の構成はソナタ形式と考えられる。

終結部（コーダ）はオーケストラの強奏によって第一主題を変ホ長調で開始し、次第にテンポを上げて、一気にこの曲を歌いきる。